

熱く 羽ばたけ 大潟っ子

白鳥



校長通信
大潟村立大潟中学校
令和2年11月20日(金) 発行
NO.7 文責:安田 和人



【感謝! 金足農業高校の皆さん】

11月10日(火)の午後、金足農業高校造園緑地科3年生7名と2名の先生が本校を訪れ、前庭の樹木の状況を診断し、本校生徒会2年生5名と合同で、土壌改善や樹木の管理などを行いました。生徒たちは雪や小雨がちらつく寒い中、約2時間一生懸命作業を行いました。この事業は、高校生の樹木管理実習の一環でもあり、手入れを通じて中・高生の大変良い交流になりました。本校卒業生の金〇〇さんも参加し、母校への思いもお話してくれました。当日は、AKT秋田テレビなどが取材に訪れ、翌日のニュース番組で放映されました。(期間は限られていますが、インターネット上で動画配信され現在も視聴できます)

今後も樹木を大切に管理し、大きく育てていきたいものです。金足農業高校の皆さん、お忙しい中本当にありがとうございました。



【人権を考える】

前号の校長通信の続きになりますが、「令和2年度携帯電話等、インターネット利用実態調査」の中で、SNS等のトラブルや被害にあったという人もいることが分かりました。このように、常に危険が潜んでいることを自覚して、インターネット等は使用しなければなりません。「自分は大丈夫」ということは決してありません。特に、中・高生に多い「ネットいじめ」や「SNSトラブル」は、『人権侵害』にもつながっていきます。「人権」については、3年生の社会科で詳しく学習しますが、下に記載したことを大中生全員で共通理解していきましょう。

『人権』とは「人の権利」のことで、分かりやすく言うと「一人一人が大切にされ、幸せに生きる」ことです。子どもにとっての人権とは、〔きれいな水を飲み、栄養のある食べ物を食べ、清潔な服を着て、安全な家で過ごし、布団で眠ることができる。また、学校で勉強することができ、友だちと仲よく遊ぶことができる〕などといった、皆さんにとっては当たり前と思えることなのです。しかしながら世界には、食べ物がない、家がない、勉強したくてもすることができないなど、皆さんが当たり前と思っている生活ができない子どもたちが、現実にはたくさんいるのです。つまり、人権が守られていない子どもたちです。もしかすると、皆さんの中にも人権が守られていない人がいるかもしれません。それは、暴力を受けたり、いじめられたりしている場合です。人権とは、「一人一人が大切にされ、幸せに生きる」ことです。いじめられて嫌な思いをしていたら、その人の人権は守られていないことになります。

学校内外を含めた日常生活において、もし周りの人が嫌な思いをしているのを見たり聞いたりした場合は、それを止めなければなりません。自分で止めることが無理なときは、周りの大人(先生や家族等)に助けを求めることが必要です。また、直接相手に言えないことを他の人に話したり、相手の家族が聞いたら傷つくようなことを言うてはいけません。これらのことが、いじめのない大中をつくることにつながっていくと思います。

【笑顔満開政策～いじめのない環境づくり～】

上記は、生徒会執行部を中心に、生徒集会で全校で承認された「いじめ予防プロジェクト」の名称です。今後、生徒会の提案により、各委員会においてもいじめを無くすために、様々な取組を進めて行く予定です。また、学校では「学校いじめ防止基本方針」を作成し、HPに掲載しています。この基本方針は、国で定めた法律「いじめ防止対策推進法(平成25年6月28日公布)」を受けて、その理念を実現し、大潟中学校すべての生徒がいじめの恐れや害悪から解放され、生き生きと学ぶことができるようにするために、教職員、生徒、保護者、地域が一体となって取り組むための指針です。

いじめはもちろんのこと、人間関係のトラブル、困りごとがあつて悩んだり、つらい思いをしたりしているとき、学校では誰でもいいので相談しやすい先生にまずは話してください。手紙でもかまいません。先生たちは、日常の観察で一人一人の表情や行動に変化が見られる場合は、情報を共有してすぐに対応できるようにもしています。自分が悪いからいじめられるのではないかと心配する必要は全くありません。いじめは、理由がどうあれ、あつてはならないものなのです。

次に、いじめ体験を本にした中川翔子さんへ、小・中・高生がインタビューした記事(読売新聞オンライン 中高生新聞)を紹介しします。この本はいじめられた人がどんな心理状態で、何を考えているのかがよく分かる内容でした。機会があつたら、是非一度読んでほしいものです。

悩み、苦しむ子の助けに

「しょこたん」の愛称で親しまれ、タレントや歌手として活躍している中川翔子さん(35)が、中学生の頃のいじめ体験をつづった『『死ぬんじゃねーぞ!!』いじめられている君はゼッタイ悪くない』(文芸春秋)が、共感を集めています。中川さんに、本に込めた思いを聞きました。



好きなこと否定され

中川さんは、漫画やゲームが大好きで、絵を描くのも好きだったそう。小学生までは絵をみんなに認められ、文集のイラストなども頼まれていたといいます。ところが、中学生になり、同じように絵を描いていたら、「オタク」「キモい」と陰口を言われるようになりました。好きなことを否定され、芸能界や恋愛の話題にもついていけず、クラスの中にできた“階層”では一番下。学校に行くと気分が悪くなって吐いてしまい、ひどいあだ名も付けられました。

ある時、靴を隠されて先生に打ち明けると、新しい靴を渡されましたが、いじめには対応することなく、靴代を請求されました。「もう大人も信用できない」と絶望し、学校に行けなくなってしまいました。親にも言えず、何度も「死にたい」と思い詰めたという中川さんを支えたのは、漫画を描いたり映画を見たり、ゲームをしたりと、好きなことに熱中する時間だったといいます。祖母に買ってもらったパソコンで、チャットを楽しんだり、自分と同じような趣味を持つ人がたくさんいることを知ったりしたことで、「息ができる場所を見つけられた」と話します。

—(中略)—

心震える瞬間が来る

ジュニア記者が、「いじめられているクラスメートにどう接したらいいのか」と尋ねると、「ゲームでも何でもいいから一緒にして笑い合えたら、その子はびっくりするくらい強くなれると思う」という答えが返ってきました。中川さん自身、いじめられていた時に、いじめに触れることなく、一緒に笑ってくれた友達がいて、とてもうれしかったそうです。だからこそ、ただそばにいて寄り添う「隣となる人」の存在が大きな支えになる、と教えてくれました。本のタイトルは、ライブで、観客を前に、「あのとき死ななくてよかった」と感じ、思わず叫んだ言葉からとったそうです。「死なずに生き延びたら、必ず、『生きててよかった』と心震える瞬間が来る。そんな瞬間を重ねることが、いじめた人を見返すことにもなる」と中川さん。丁寧に話をしてくれる姿に、今苦しんでいる子の助けになりたいという強い思いが伝わってきました。

～中川翔子さんからのメッセージ～

「いじめ自体をなくすのは難しいけど、それによって命を絶つことは限りなくゼロにできると思う」